

植民地主義による変容 - エジプトにおけるムスリム同胞団の躍進と サイド・クトゥブ思想の深化 -

World Transformation under Colonialism: Thoughts of Sayyid Qutob and Muslim Brotherhood in Egypt

座喜 純

はじめに

エジプトの国民議会選挙において大躍進を遂げた、政府非公認の違法組織と称される「ムスリム同胞団」と同胞団の精神的指導者としてナセル政権下で処刑され、今日も世界中でその思想に関する研究が進められ、国際社会に影響を与え続けている思想家サイド・クトゥブに関して、史実に基づいて正しく伝える情報は非常に少なく、事実が歪曲されたり誤報されたりしているのが現状である。両者の原点は、20世紀前半のエジプトにおけるイギリスの植民地主義と保護国化への抵抗と、エジプトにとって外来勢力であるオスマントルコ系王族によるエジプト王政からの脱却であった。

本論では、植民地主義の波及による変容の一事例として、20世紀前半のエジプトにおけるムスリム同胞団の設立経緯やサイド・クトゥブの思想の深化を、史実やイスラーム的な専門知識に基づいて調査・分析することにより、このような変容が今日のエジプト、中東社会、ひいては国際社会全体に及ぼす影響と警鐘について考察し、未来への問題解決の鍵となる普遍性を探究するものとする。

今日の国際社会におけるムスリム同胞団とクトゥブ思想に関する報道と誤解

2005年に実施されたエジプトの国民議会選挙において、政府非公認の違法組織と称される「ムスリム同胞団」が選挙期間中にさまざまな選挙妨害を受けたにもかかわらず、全議員数444人の20%にあたる88議席を勝ち取り大躍進を遂げた。

この結果、ムスリム同胞団は国際的にクローズアップされ、この組織に関するさまざまな情報が飛び交うことになった。そのような報道の中には、彼らを秘密結社として取り扱うものもあれば、或いはまた政治的罪状でエジプト政府から違法組織として告発されてきた組織と紹介するものもあり、総じて、ムスリム同胞団は民主主義を根底から否定し、女性の権利や言論の自由を認めず、外国人相手の観光業を妨害し、エジプトの産業の発展を著しく妨げる暴力主義の政治組織であるかのようなイメージが先行している。

「ムスリム同胞団はイスラーム復興を目指す大衆運動組織であり、しばしば現代における最も代表的なイスラーム復興運動とされる。1928年にエジプトで結成されて以来、アラブ諸国に大きく広がり、同胞団系組織の存在が確認される国は15ヶ国を超え、そのような同胞団系組織

のうちの過半数がそれぞれの国のイスラーム復興運動の中で最大規模の組織となっている。同胞団の立場はきわめて保守的なイスラーム復古主義と過激な民族主義の双方に見出される。アラブ諸国の民族主義運動の指導者のなかには一時期ムスリム同胞団の影響を受けた者も少なくなく、その多くは各国の政権から無気味な右翼過激派と見なされている。」これは、同胞団に関して一般紙で解説された記事の抜粋である。

しかし、ムスリム同胞団という看板を取り下げれば組織を公認するというサダト政権時の政府申し入れを拒否して、組織自らの理念と理想を遵守すべく半世紀以上にわたって政府非公認の違法組織との烙印を甘受しながら活動を継続してきたという事実こそが、ムスリム同胞団の実態である。本来このような非公認組織は政治的に非常に弱い立場に立たされるのが世の常ではあるが、ムスリム同胞団は1928年の結成以来、エジプト国民の絶大な支持を得て今日まで存続してきた実績を持つ。そればかりか彼らは、その存在と影響力を中東地域に拡大してきた。エジプト国民議会選挙の結果は、彼らに対する内外の支持がどのようなものであったかを改めて現わしたものとなっている。

このような経緯と事実を鑑みるならば、ムスリム同胞団に関する様々な報道情報の信憑性を疑わざるを得ないのは自明であろう。国際社会において注目を集めているにも関わらず、残念ながら同胞団に関して、史実に基づいて正しく伝える情報は非常に少なく、事実が歪曲されたり誤報されたりしているのが現状である。

ムスリム同胞団が国際的にクローズアップされる一方で、同胞団の精神的指導者として、ナセル政権下で処刑されたサイド・クトゥブの思想もまた、イスラーム世界のみならずノンムスリムの人々にまで広く注目を集め続けている。クトゥブの著作の大半は現在も発刊禁止になっているにもかかわらず、今日に至るまで読み継がれ、欧米諸国においても彼の思想研究は、今なお進展している。近年、ナセル政権の弾圧によるクトゥブの処刑を現代の殉教と見なし、彼の著書「道しるべ」をマニフェストと信奉するクトゥブ主義者と称される人々の中にはウサーマ・ビン・ラディンをはじめとするアルカイダのメンバーも含まれることから、欧米メディアでは、クトゥブ思想を、聖戦という大義のもとに極端な暴力手段を取る狂信的なテロ組織の急先鋒と位置づけ、科学の発展、物質的繁栄、人類の進歩を否定する反近代主義、反知性主義、狂信主義、アナクロニズムのように論評しがちであるが、このような報道もまた史実に基づいた根拠の無い誤解の産物と言えよう。

ここで我々は、今日、このように国際社会で取り上げられるムスリム同胞団の躍進もサイド・クトゥブの思想の深化も、その発端は20世紀前半のエジプトにおけるイギリスの植民地主義と保護国化に対する抵抗と、エジプトにとって外来勢力であるオスマントルコ系王族によるエジプト王政への批判、植民地主義からの完全な脱却であったという事実にもう一度注視すべきである。次章以降、この視点から、ムスリム同胞団の設立とクトゥブの思想の深化を考察していく。

ムスリム同胞団の設立経緯：エジプトにおける植民地主義と独立運動

今日、エジプト最大・最強の民衆組織「ムスリム同胞団」は、1928年3月、エジプトのスエ

ズ運河西岸中部のイスマイリーヤ市において、「イスラームのために奉仕するムスリムの同胞たち」として、ハサン・アルバンナと彼の思想に共鳴する6人のイギリス軍キャンプ労働者によって結成された。

ハサンは、カイロ北西の小さな町ムハマディーヤに生まれ、モスクのイマームであった父とクッターブの教師から厳格な信仰教育を受け、非常に敬虔なムスリムとして育った。17歳でカイロにやって来たハサンは、近代的、西洋的な大都市カイロの世俗的、非イスラーム的、西欧風の生活に強い衝撃を受けた。当時、カイロの世俗的知識人階級は無神論者のように語り、その生活はイスラームから著しく逸脱したものであったからである。しかし、カイロのダーラル・ウルームを卒業し、教師として赴任したイスマイリーヤ市で、彼はカイロ以上に強烈な衝撃を受ける。当時、イギリスの軍事基地と運河会社の外国人職員集団の本拠地であった同市は、主要なビジネス、公益事業をイギリスに支配され、もはやエジプトの都市ではなく西洋そのものであり、植民地搾取の象徴であったからである。同市において外国人は豪華なヴィラに居住し、泥とアシの葉で囲んだ粗末な家に暮らすエジプト人は、外国人のための日雇い労働者として奴隷のような生活を送っていた。そこで、ハサンたちは、植民地主義から脱却してムスリムの尊厳を奪回することを目指し、ムスリムの繁栄のために立ち上がった。

7名の団結から始まったムスリム同胞団は、支部網と団員数の拡大に伴い、本部をカイロに移し、1946～1948年のピーク時の団員数は30～60万人と推定され、その他に50万人のシンパが存在したため、「100万人の声を代弁している」という同胞団の主張は決して誇張ではなかった。団員は、公務員、警察、軍隊、各種組合に浸透して機関誌を発行し、家内工業的だった営利組織は有力な企業体に発展して資金源となった。このような同胞団は、国家の中の国家に成長し、更に国境を越えてパレスチナ、ヨルダン、シリア、イラクに支部、連絡機関を設立した。

第二次世界大戦末期のエジプト社会は革命状況へと進み、やがて同胞団においても政治活動は優越されるようになり、同胞団は次第に政治勢力となっていった。政治勢力となった同胞団の敵対ターゲットは、エジプトを植民地としたイギリスとエジプト人にとって外来勢力であるオスマントルコ系王族が統治するエジプト王政であった。第二次世界大戦終結後、エジプト人の誰もがエジプトの独立を指向した。この時代に同胞団は、団員も支持者も大幅に拡大し、エジプトの主要政治勢力としてエジプト独立解放運動の旗手となっていった。エジプトの独立解放を目指すエジプト英軍の青年将校グループ「自由将校団」は、当時、諸方面に大きな影響力を持っていた同胞団に接近し、互いが目指す共通項を見出した。

1952年のエジプト独立は、自由将校団が表舞台に立ち同胞団が裏から支援する体勢で起こり、エジプトは無血で独立を勝ち取った。この後、同胞団は自由将校団への支援を継続したが1954年10月、アレキサンドリアにおいて自由将校団の英雄的中心人物であるナセル大統領の暗殺未遂事件が起こった。ナセル政権はこの事件をきっかけに、それまで彼らを支援してきたムスリム同胞団と絶縁し、更に同胞団メンバーを多数投獄した。しかながら現在では、当時、暗殺者として逮捕された者のピストルが、弾道検査の結果、暗殺未遂事件当日に使用されていなかった事実が判明しており、この事件は、ナセル政権が同胞団組織の解体を目論んだ結果ではないかと言われている。この事件以降現在に至るまで、ムスリム同胞団はエジプト政府非公認違法

組織という扱いを受けるようになった。

ムスリム同胞団の理念と行動規範

ムスリム同胞団に対する誤った認識が広がっていることは前述したが、実際のムスリム同胞団はこのようにエジプトを植民地化するイギリスや、エジプトにとって外来勢力であるオスマントルコ系王族(ムハンマド・アリーの子孫たち)の統治支配に対する独立・抵抗運動を発端として設立された。同胞団は植民地下のエジプトにおいて、当時、国民に与えられていなかった教育・社会福祉・医療健康などの向上を中心にした積極的な活動を継続して、エジプト独自の政治兼福祉組織の役割を果たすことになった。

それでは、エジプトにおいて独自の役割を果たしているムスリム同胞団の真の姿、実態とは一体どのようなものなのか。彼らはどのような理念と行動規範を基盤とした組織であるのか、ここで再確認しなければならない。

同胞団の教育・倫理価値・法律・社会保障・社会規範の全ては、唯一神アッラーの命令とアッラーの使徒であるムハンマドの実行に基づくというのが基本理念であり、行動規範となっている。そしてイスラームにおける「自由」とは、唯一神アッラーから全ての人間にもたらされるものであり、それは人種・民族・肌の色・信仰・性別などを問わず、全ての人々が平等に享受できるものであると訴えた。同胞団はこのイスラーム的な自由の実現を強く主張し、その具現化として信仰の自由、国家組織や社会での意思決定への参加の自由、投票の自由などを掲げ、エジプト国家にこれらの自由の実現を要求し続けてきた。同胞団が考える国家政策とは、国家の安全保障を守ることと、国家の「自由・独立」を保持することの二つである。

ムスリム同胞団は、啓典クルアーンと預言者の言行録であるハディースならびに正統派4代カリフである預言者の教友たちの言行録を基盤とする、理想的なイスラーム国家の建設を目指している。そのイスラーム国家実現の手段として、彼らは国家のあらゆる分野においてイスラーム法(シャリーア)を遵守することによる、イスラームの真理の追求と啓蒙と実践を掲げている。同胞団の行動規範は、聖典クルアーン16章125節にある『人々の最良の規範となり、英知をもって、主の道に導きなさい』に則ることにあり、またこれに基づいて人々と対話し、自分たちの信念を具現化していくことにある。

イスラーム国家における最も重要な柱は、「知」(アル・イルム)である。同胞団はこのような「知」の追求は、国家から国民に与えられるべき権利であり、その一方で、国民はムスリムとしてこの「知」をより高めていく義務を負うものであるとしている。また同胞団の理念では、「正義」の実現も「知」の追求と相並ぶ国家の重要な課題とされている。この正義の実現には当然「平等」と「法治国家」が前提となるため、彼らはこの前提条件をエジプト国家がクリアすることも強く要求し続けることになった。さらに国際関係においては、互いの「知」を交流することによる支援協力を重要視し、他国への介入・干渉を決して行わないことを行動規範として掲げてきた。

同胞団は、国家の独裁、占有を回避するため多くの人々が参加する協議を通じた合意を形成するシューラー(協議)というイスラーム古来の制度への回帰を訴えてきた。理想的な意思決定

システムとして、彼らは政治制度のみならず社会問題のあらゆる問題解決にいたるまで、このシューラー制度の採用を強く求めてきた。

このようにムスリム同胞団の理念と行動規範、そしてその活動の軌跡を辿ると、彼らの存在意義や本来のイスラームの教えとその真理を基盤とした行動の実践が、「保守的なイスラーム復古主義と過激な民族主義」といった扇動的なキャッチフレーズのメディア報道から如何に乖離しているか理解できるであろう。設立以来、彼らは、穏健なるイスラーム思想とその実践によって、国内外の平和的な環境を作り出し、国家の安定とその発展を推進し豊かな社会と自由で健康な国民生活を実現することを理想としてきたのである。

サイド・クトゥブの幼少期とエジプト近代化・植民地主義の隘路

1949年にムスリム同胞団の設立者ハサン・アルバンナが暗殺された後、同胞団の精神的指導者となった思想家サイド・クトゥブは、1906年、ナイル川中流域のアシュート市近郊のムーシャ村に生まれた。彼は、自伝「村の少年」の中で、当時のエジプト農村の生活、風俗習慣、植民地主義による搾取や圧制、民族独立運動について鮮明に描いている。彼の幼少期は、イギリスの植民地主義・保護国化とそれに対抗する民族独立運動の嵐の真っ只中にあり、エジプト近代化の隘路の中で、後にクトゥブ思想となる萌芽は育まれることとなる。

当時エジプトでは、二つの知識階級が並存していた。一つは伝統的なイスラーム社会における知識人で、イスラームに精通したアーリム、ウラマーと称される人々であった。それに対して、アフアンディと呼ばれる世俗の諸学問に精通した新知識階級が台頭し、政府の役人、教員としてエジプトの近代化に当たっていた。裕福ではないが、ムーシャ村の名家に生まれたクトゥブの教育について、一族の間で、イスラームの伝統に則ったクッターブと、アフアンディとして立身出世させるための官立学校のどちらに進学させるか論争が起きたが、その結果、クトゥブはアフアンディとなることを囑望され、世俗教育を受けるため官立学校に進学した。官立小学校時代、クトゥブはクッターブに進学しなかったにもかかわらず、クルアーン全文を暗誦し、独立運動支持政党である祖国党の委員会メンバーである父の影響と、熱狂的な愛国独立主義の小学校の校長との交流を通じて、愛国心と民族独立心に覚醒していく。その一方でクトゥブは、名家に生まれ、何不自由なく育った自分とムーシャ村の人々の生活の落差を目の当たりにして、エジプト社会における貧困層の生活の実態に強い衝撃を受け、貧富格差の根絶と平等を願う正義感にも目覚めていく。このようなクトゥブの幼少経験が、後のクトゥブ思想の素地となっていったことは自明であろう。

クトゥブの転機

その後中等教育を終えて、カイロのダーラル・ウルームに進学し、官僚として教育省に勤務したクトゥブは、なぜ囑望されたアフアンディの道を手に入れながら、イスラーム回帰によって人々の解放を求める活動家に変身することになったのか。

1948年、著作「イスラームの社会主義」の中でクトゥブは、社会的不正義、貧困、絶望的な貧富格差を弾劾する。当時エジプトでは、0.5%にしか過ぎない特権階級が国民所得の半分を占

有しており、クトゥブは、このような社会状況に憤り、格差と不正義の根源である革命前のエジプト王政に対する批判の記事を様々な出版物に寄稿していた。このようなクトゥブの一連の批判行為に対して王は激怒し、彼を即刻処罰するよう命じたが、その頃の王国政府はムスリム同胞団への対策で手一杯の状況でクトゥブの処分をすぐに下すことができなかった。教育省のクトゥブの上司は、王国政府の処罰を免れるように、アメリカにおいて同国の教育カリキュラム立案策定の方法論を学び、エジプトの教育制度に取り入れることを目的として、クトゥブをニューヨークに派遣した。イギリスに代わる超大国として発展するアメリカ事情を知ることによって、クトゥブの王政批判と反植民地主義的かつ社会主義的な思想が穏健化することを、上司は期待していた。

しかしこのアメリカ留学時に、クトゥブの思想を更に深化し、イスラームに魂を向けさせる大きな転機となる二つの出来事が起こった。

一つ目の事件は、1949年2月13日に起こった。クトゥブは、アメリカから遠く離れたエジプトで起きたムスリム同胞団創設者ハサン・アルバンナの暗殺事件を、アメリカ全土が熱狂的に祝賀する光景を見て、驚愕すると共に大きな衝撃を受けた。やがて失意の中で彼は、これほどまでにハサン・アルバンナを西洋全体が脅威と見なしていたという事実は、却ってハサン・アルバンナの思想や運動が正義であることを示す証拠ではないかと考え始めた。こうしてこの事件は、クトゥブがムスリム同胞団に目を向ける契機となった。

クトゥブがアメリカに留学していた当時、彼のような中近東から派遣された留学生たちを利用しようと、ヨーロッパ列強各国の大使館や政府筋は巧みに彼らへの接近をアメリカで試みていた。そのような背景下で、もう一つの契機は訪れた。ある日、クトゥブはイギリス情報局在米事務所長ジョン・ヒュワース・ダンの自宅に招待された。その際、ムスリム同胞団やハサン・アルバンナに関する話が数多く話題に上り、イギリス情報局員が驚くほど詳細な情報を知っていたことから、クトゥブは、イギリス政府が莫大な資金と労力を費やしてムスリム同胞団やハサン・アルバンナの情報を入手していることを察した。話し合いの最後に、ダンは、クトゥブを招待した目的を明らかにした。ムスリム同胞団がエジプトの政治権力を掌握することになれば、エジプトの発展の妨げになるので、クトゥブのような知識人はそれを阻止するのが務めであると彼の説得を試みたのである。更にダンも、エジプトにおける反英抵抗運動に影響を与えるような文筆活動をやめるよう彼に要請した。イギリスの影響力が無くなれば、アメリカがイギリスに取って代わってエジプトを支配するようになることは明らかであり、そうなればエジプトの状況はさらに悪化するとダンもクトゥブに説明した。

この瞬間に、それまで心の中にあった様々な疑問は全て消え去ったと、クトゥブは後に自ら語っている。そしてこの瞬間に、ムスリム同胞団こそが、クトゥブが模索していた正義の道であることが明確になり、エジプトに帰国後、すぐに同胞団に出向くことを決意したという。事実、クトゥブはアメリカから帰国後、教育省の職を辞し、ムスリム同胞団のイデオログとして、機関誌の編集長に任命された。

このように周囲の期待に反し、アメリカ留学はクトゥブを反西洋支配、反植民地主義により一層、傾斜させる結果となった。そのうえ、イスラームでは何の問題ももたらさない人種、肌

の色の差異が、アメリカでは著しい人種差別の原因であることが衝撃的かつ屈辱的であったこともクトゥブは記述している。こうしてアメリカでの二つの契機を経て、クトゥブの思想のイスラーム的基盤は確立され、彼はムスリム同胞団と行動を共にするようになった。

クトゥブ思想の深化

クトゥブは、ムスリム同胞団に参加後、処刑されるまでの時代の大半を獄中で過ごした。1954年、ナセル大統領の暗殺未遂はムスリム同胞団の犯行と見なされ、多くの同胞団関係者が逮捕された。クトゥブはその中の一人として告発され、15年の実刑判決が下された。獄中での長期間にわたる拷問の末、彼は肺機能不全と狭心症を患い、1964年に釈放された。1965年7月30日に弟のムハンマド・クトゥブが逮捕され、この逮捕への抗議文を内務省に送ったことが起訴理由として利用されて、同年8月9日にクトゥブは再逮捕された。多くの同胞団メンバーと共に再び裁判にかけられたクトゥブは、7名の同胞団メンバーと共に死刑判決を下された。処刑の前日、ナセル大統領は、クトゥブが持論を取り下げ、自らがアメリカのエージェントであったと新聞に公表すれば、死刑執行を取りやめて彼を釈放するという取引を提案したが、彼はこれをきっぱりと拒否し、1966年8月29日、潔く処刑された。この事実は、クトゥブが自らの信仰と思想を実践し、イスラーム初期の殉教者たちと同じように神が示した正しい道を遵守して殉じた証拠として、クトゥブの思想を信奉する多くの人々に大きな影響を与えていくことになる。

ムスリム同胞団に参加し、処刑されるまでの期間、クトゥブは、自ら確立したイスラーム的思想を実行に移し、同胞団への参加以前の時代に発表した自らの思想と著作の誤りを指摘・修正して、「マアールーム・フィッターイク(道しるべ)」や「フィー・ズィラーリルコルアーニ(クルアーンのご加護の下に:クルアーン解釈書)」のような数多くの著作を遺し、自身の思想を深化させた。

クトゥブは、植民地化されたイスラーム諸国が再度復興する際に世俗主義に汚されることを防ぐには、純粋にイスラームに回帰するしか手段はないと考えた。更に彼は、イスラームの世界に侵略し続けている東西の両陣営を防御する方策としても、イスラームへの回帰以外の手段はないと判断した。

イスラーム以外のシステムでは、人々は何らかの形で他人を崇拜するが、イスラーム的生活様式においてのみ、すべての人間が人間への隷従状態から自由であり、皆がアッラーの教えだけに従ってアッラーにのみ服従し、唯一神アッラーへの崇拜に献身できる。このアッラーへの帰依における人間の尊厳が道の分かれるところであり、これこそ我々が保有し、人類に提供できる新しい概念であり、人間の生活の実践的なすべてを支配するこの概念と生活様式こそが、人類に欠けている死活的なメッセージであり、これを我々は、イスラームと呼ぶ、とクトゥブは訴求している。

また彼は、イスラームの究極の目標は、人間に「人間性」を覚醒させ、力強い共同体を發展させて、その共同体に属する人間をあらゆる局面において高めることであると記述している。

「人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これ

はあなた方を、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなた方のなかで最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にしてあらゆることに通曉しておられる」(四九章一三節)このようにクルアーンでは、人間同士、男女間、そして民族間の平等と共存が明記されている。

このクルアーンの啓示のもとで、クトゥブとムスリム同胞団は、人種、肌の色、言語、国、地域、国益といった低位の結合を超越し、信仰の絆を基盤として互いに尊敬し合う平等な人間関係の下に団結する共同体を追求している。そして全世界の全ての人々を人間への隷従から解放し、完全な自由を人々に取り戻すというムスリムの使命と、神の示された正義の道を開くための奮闘を希求している。

現代社会への警鐘

「歴史は、数々の出来事そのものではなく、その出来事の解釈である。それらの出来事との関連性を知ることが重要であるが、その一方で人間は、自らの魂、精神、思想、物質的な特性や森羅万象におけるあらゆる価値観を理解することも重要である。」これはサイド・クトゥブの遺した有名な言葉である。

ここまでムスリム同胞団やクトゥブ思想の軌跡を辿ってきたが、なぜ彼らが純粋なイスラームへの回帰と唯一神であるアッラーの教えに絶対的に帰依し、その正義の道を希求して奮闘してきたのか、その事実についてもう一度、我々は熟考すべきであろう。

クトゥブは、共産主義体制下での一般大衆の屈辱も、また資本主義体制下での貪欲な富の追求と帝国主義による諸民族、諸国家の搾取も、神の被造物である人間に対する抑圧であると訴えた。なぜならば、それは、人間が神から賜った人間としての尊厳の否定に他ならないからである。

このようなクトゥブ思想もムスリム同胞団の活動も、ともすればイスラームに回帰しようとする彼らの活動とその波及事実のみに注視されがちであるが、我々は、彼らの思想と活動の発端に存在するものについて、より注意深く考察すべきであろう。全ての人間が人間による隷属から自由になり、人間としての自由と尊厳を取り戻し、互いに尊敬し合う平等な人間関係の下に団結すること、植民地主義や国外勢力による統治政権への抵抗と独立は、ムスリム、ノンムスリムに関わらず、人として追求すべき基本的な権利であり義務である。クトゥブ思想とムスリム同胞団の本来の趣旨も、その点は何ら普遍である。

本論では、エジプトにおける植民地主義による変容として、ムスリム同胞団とサイド・クトゥブの思想を事例として取り上げたが、エジプト同様に植民地主義の変容が今日まで影を落としている国家・地域は多数存在する。

欧米諸国が自国の利益を優先するために、中東やアフガニスタン、アフリカ地域で独裁体制や権威主義体制を支援してきたという事実を、現地の人々は決して忘れていない。そのような状況下で、特に天然資源を保有する国々に対して、今なお「民主化」と称する介入と占領は強行されている。

植民地主義の変容の中で人々は、神から賜った権力を自らの手で所有するとともに自らの手

でその権力を行使し、そして義務を果たすことを、さらに社会集団の諸活動のあり方や人間の生活態度にも個人の自由と万人の平等が約束されることを渴望している。それは、彼らの願いであると共に、全ての人々に与えられた権利であり、義務でもあることを我々は忘れてはならない。真の自由と尊厳について強く認識し、それを渴望する人々にとって、植民地勢力によって押し付けられた民主主義と自由は、何の価値ももたらさないばかりか、それを強要することは罪のない人々に苦痛を強いる結果に陥るのは自明である。

大多数のムスリムは敬虔かつ極めて穏健であり、いかなる信条においても絶対主義的な観念など抱いていない。イスラームの教えに帰依して平和を渴望する彼らは、信仰や聖戦の大義名分の下に狂信的な暴力行為を働こうとする特別な願望など微塵も持ち合わせてはいない。そればかりか彼らは、西洋の政治に堅固に制度化されている民主主義や人権などの様々な西洋思想や西洋的な自由、すなわち西洋文明を、ノンムスリムがもたらす信仰汚染と見なして拒絶することもない。しかし長年にわたる植民地主義の変容によって、西洋諸国の脅威が今日もなお現実として存続している現在、西洋を脅威と考える過激な狂信主義者を批判することは、同胞に対する裏切り行為であり、植民地主義と西洋に屈服することに値する。今日、大多数の穏健かつ敬虔なムスリムは、暴力的かつ絶対主義的な狂信主義者の言動に対する嫌悪と、植民地主義或いはそれと同様の脅威への憤りと抵抗の間で引き裂かれているのである。このように、文明を衝突させ、文明内の衝突を強要しているのは西洋であるという事実は、植民地主義の変容下にある人々に大きなジレンマと試練を与え続けている。

おわりに

現在の世界情勢を踏まえて、今、あらためてクトゥブの思想と業績を考察すると、彼の言動が鋭敏な先見性に基づいた未来に対する警鐘であったことに驚かされる。

共産主義、資本主義、民主主義などの形態は、人々を救うという意義では、クトゥブの時代から既に破綻しており、そのような破綻状況を自ら認識しながら、正そうとしないばかりか、その力を歪曲して矛先を国外に向けて、他国・他地域における覇権・利権を競い合った。今日では、その構図は、植民地主義や自国への干渉・侵攻、人権侵害に抗議・抵抗する人々の集団を押し並べてテロ組織という名の下に打倒する形態を取るようになった。クトゥブやムスリム同胞団は、このような状況を誰よりも早く見抜き、その解決の鍵としてイスラーム世界がアイデンティティを確立することを訴求したのである。

現在、パレスチナやイラク、アフガニスタン、そして東トルキスタン(ウイグル)地域で起きている深刻な事態は、いずれも植民地主義の変容に他ならず、人々はクトゥブの予見通りの窮状に陥っている。このような、昨今の世界の潮流を俯瞰すると、クトゥブとムスリム同胞団が追求してきた「人間が人間への隷従状態から自由になること」の真理についてあらためて考究せずにはいられない。今こそ、彼らが希求した正義の道と現代社会に鳴らした警鐘を真摯に受け止めて、人類の真正な自由と尊厳について再考すべきではなかるうか。

参考文献

- アッシャルクルアウサト新聞社 <http://www.asharqalawsat.com>
- アルアハラーム新聞社 <http://www.ahram.org.eg>
- アルウスブー新聞社 <http://www.elosboa.com>
- アルクドス新聞社 <http://www.alquds.co.uk>
- イスラームオンライン <http://www.islamonline.net>
- 外務省各国地域情勢 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/middleeast.html>
- カタール衛星テレビ アルジャジーラ <http://www.aljazeera.net>
- 国際開発センター http://www.idcj.or.jp/1DS/11DS_ee_f.html
- サイド・クトゥブ著作一覧 <http://www.daawa-info.net>
- (財) 日本エネルギー経済研究所 中東研究センター <http://jime.ieej.or.jp>
- 日本国際問題研究所 <http://www.jiia.or.jp>
- マンバル・アッタウヒード <http://www.tawhed.ws>
- ムスリム同胞団ホームページ <http://www.ikhwanonline.com>
- ムハンマド・アッバース博士サイト <http://www.mohamadabbas.net>
- R・A・ダール『デモクラシーとは何か』岩波書店、2001
- 石田徹『自由民主主義体制分析-多元主義・コーポラティズム・デュアリズム』法律文化社、1992
- 伊能武次著『エジプト：転換期の国家と社会』朔北社、2001.7
- イブン・イスハーク著、座喜純・岡島稔・共訳『預言者の生涯（第一巻）』理想書店、2009
- ギジェルモ・オドンネル、フィリップ・シュミッター著『民主化の比較政治学：権威主義支配以後の政治世界』未来社、1991
- 小杉泰編『ムスリム同胞団：研究の課題と展望』国際大学国際関係学研究科<中東地域研究>、1989.3
- サイド・クトゥブ著、岡島稔・座喜純訳・解説『イスラーム原理主義の「道しるべ」』第三書館、2008.8
- 座喜純著『常態のイスラーム—いまだ照らされていない世界』穂高書店(アジア文化叢書(14))、2003
- ジョン・エスポズイト、ジョン・ボル、『イスラームと民主主義』宮原辰夫、大和隆介共訳、成文堂、2000
- 中岡三益・板垣雄三著『アラブの現代史』東洋経済新報社、1959
- 日本国際政治学会編『中東：1970年代の政治変動』日本国際政治学会、1983.5
- 林武著『現代アラブの政治と社会』アジア経済研究所、1974
- Christina Phelps Harris, "Nationalism and revolution in Egypt: the role of the Muslim

- Brotherhood” , Mouton, 1964
- Hasan S. Badrul, “Syed Qutb Shaheed” , Islamic Publications International, 1982
 - Maye Kassem, “Egyptian Politics: The Dynamics of Authoritarian Rule” , Lynne Rienner, 2004
 - Nathan J. Brown and Hesham Nasr, “Egypt’ s Judges Step Forward: the Judicial Election Boycott and Egyptian Reform” , Policy Outlook, Carnegie Endowment for International Peace, May 2005
 - Paul Berman, “The Philosopher of Islamic Terror” , New York Times Magazine, 2003
 - Robert Irwin, “Is this the man who inspired Bin Laden?” , The Guardian, 2001
 - Sayed Khatab, “The Political Thought of Sayyid Qutb: The Theory of Jahiliyyah, Routledge”, 2006
 - Sayed Khatab, “The Power of Sovereignty: The Political and Ideological Philosophy of Sayyid Qutb”, Routledge, 2006
 - William Shepard, “Sayyid Qutb and Islamic Activism: a translation and critical analysis of Social Justice in Islam Leiden” , EJ. Brill, 1996